

【活用にあって】

語彙力を付けるには、多くの活字に接することが大切です。新聞や本をたくさん読むことです。

新聞を読んでいると、今まで出合ったことのない言葉に出合うことがあります。どんな意味なのか前後の文脈から推定できないときもあります。そんな時は迷わず国語辞典で調べましょう。語源や、その語がどのようにして伝わってきたのかなど、「言葉の秘密」に触れることができるかもしれません。

解答例

問 1 : 江戸

問 2 : 黒衣（くろこ・くろご）

①歌舞伎で黒い衣服を着た後見人。また、その衣服。

②かげで支える人。

二枚目（にまいめ）

次ページの記事を参照してください。

発展：2017年3月27日付の中日新聞が参考になります。

このように、新聞は語彙力を付けるにはもってこいなのです。

粋也歌舞伎詞

四百年以上の歴史を誇る歌舞伎だが、新たな趣向で上演しようという模索が進んでいる。その一つである、江戸時代の芝居小屋の風情を味わえる公演「名古屋平成中村座」が六月、名古屋城にやってくる。歌舞伎は格式の高い「古典芸能」と思われがちだが、実は違つ。私たちが日常的に使っている言葉の中には歌舞伎由来のものが意外とある。江戸時代、庶民の間で育まれてきたからこそ、現代にも脈々と受け継がれている。
(放送芸能部・加藤智子)

いきだね かぶきのことば

黒幕

主に夜の場面を示す背景幕として、また、死んだ人物や、舞台の不要な部分を隠すために使われる。現代のように、表面に出ず陰で他人を操る人物というマイナスの意味合いはなかった。

修羅場

もとは阿修羅と帝釈天が闘う場所のこと。歌舞伎では写実的な戦闘場面に限って使われるが、現代では男女のトラブルを表す言葉として多く用いられる。

幕の内弁当

幕の内とは芝居と芝居の間の休憩時間幕間などのこと。幕の内に食べた俵形のご飯におかずがついた弁当を指す。観客が食べた、役者が食べたなど諸説ある。

見得

役柄の感情が高まる局面で、演技の途中で静止し、その人物をクロスアップさせるため、固定したポーズをとること。現代では、自分の力をことさらに誇示するような態度を指す。

二枚目

江戸時代大阪では劇場正面に掲げる看板の二枚目(二番目)に、やわらかい演技を得意とする若手の人気俳優の名前を書くことになっており、後に美男子、やさ男を表す意味に転じた。三枚目は滑稽なことをする役、道化役。

定式幕

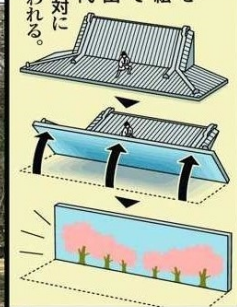
歌舞伎の舞台で使われる引幕。黒、柿、萌葱の三色を思い浮かべるが、中村座は黒、白、柿の三色。初代勘三郎が、幕府の御用船が江戸に入港するとき、得意の木遣りで櫓こぎの音頭をとったばうびに船覆いの幕を拝顔し、後にその配色が定式幕となったと伝えられている。

どんでん返し

立体的に飾られた屋体を九〇度後ろに倒し、背景の絵が描かれた底面を垂直に立てる舞台転換のこと。大話の演出として用いられる。転じて現代では、話の展開や物事が正反対にひっくり返るという意味に使われる。

市松模様

二色の正方形を互い違いに組み合わせた紋様。江戸時代中期、女形の初代佐野川市松がこの模様の衣装を着たことで「一般女性の間で大流行して」市松模様」と言われるようになった。三年後の東京五輪、パリンピックのエンブレムに使われている。



イラスト：中村座

